

【要旨】

中国語母語話者の二字漢字語の受容における母語の影響
-母語知識の利用に着目して-

陳 夢夏

この論文は、中国語を母語とする日本語学習者が、母語知識を利用して効率よく漢字語の学習を実現するために行った、二字漢字語の受容における習得研究である。

中国語母語話者は全世界の日本語学習者の70%以上を占めており、日本語教育にとって極めて重要な対象であるにもかかわらず、これまで、中国語母語話者に特化した研究はほとんどされてこなかった。そこには、第二言語習得理論における中間言語理論の伸長や、母語別の教育が日本国内ではほぼ一貫して否定されてきたことなどが背景としてあるが、これからは、そうした点に配慮はしつつも、学習者の母語を考えた日本語教育を考えていくことが不可欠である。

本論文の大きな目的の一つは、これまで議論されてこなかった新たな観点を加え、より中国語母語話者の二字漢字語の習得に役立つ新しい枠組みを提案することである。そして、既存の習得研究を検討し、より適切な調査法を提案した上で、(1) 日本語習熟度、(2) 学習者の知識レベル、(3) ストラテジーの使用、(4) 語の習得難易度、という4点が二字漢字語の受容に与える影響を検討することである。

本論の流れは、第2章では既存の二字漢字語に関する日中対照分析の枠組みを概観し、第3章では従来の枠組みに基づいた習得研究を概観する。そして、第4章では、既存の最も新しい枠組みと調査法に基づいて探索的調査を行い、中国語母語話者による未習漢字語の意味推測の実態をある程度明らかにするとともに、先行研究の問題点も述べる。第5章では筆者が提案する新しい枠組みの内容、分類の手順・結果について述べる。第6章、第7章では、新たな枠組みに基づいて、質的調査と量的調査を行い、第8章では、第4章、第6章、第7章の3つの調査結果を総合的に考察し、読解場面における二字漢字語の受容の実態を論じる。

第2章と第5章について具体的に述べると、第2章では、従来の漢字・漢字語のみの意味分類と和語も含めた分類を分けて概観した。その結果、先行研究には2つの問題点があると言える。一つは、従来の枠組みが全て語ごとに日中の意味対応関係を議論してきた辞書ベースの分類だということであり、もう一つは「中国語にない」語をN語とする視点である。中国語母語話者の立場から考えると、単語レベルではなく、文脈における「意味的に対応する中国語」まで考えて分類する必要がある。すなわち、

- (1) 中国語母語話者を対象とする日本語教育の立場から考え、役立つ枠組みを提案するのなら、中国語母語話者の視点から意味対応関係を見直す必要がある。
- (2) 辞書ベースの分類基準ではなく、使用実態、すなわち具体的な文脈を見ながら分類基準を定める必要がある。
- (3) 多くの語は複数の意味を持っているため、語単位ではなく、意味単位で分類すべきである。

以上の3点を踏まえ、第5章では、母語知識を利用するという観点から、NJO (Nothing in Japanese Orthography) という視点で、意味ごとに検討した上での新しい枠組みを提案し、約500の意味を実際に分類した。

新しい枠組みでは、二字漢字語が、SJO (Same in Japanese Orthography) 類の「漢字語と意味的に対応する中国語が漢字語と同形である」語、OJO (Overlap in Japanese Orthography) 類の「漢字語と意味的に対応する中国語が漢字語と同形ではないが、日本語に存在する」語、及びNJO 類の「漢字語と意味的に対応する中国語が日本語には存在しない」語に分類された。

第3章について具体的に述べると、従来の意味対応関係に基づく研究は、「学習者の中間言語を見る研究」、「意味推測の研究」、「認知処理過程の研究」、「既存の辞書とデータベース」に分けられる。

学習者の中間言語を見る研究には、学習者の判断が習得に与える影響が十分に考慮されていないという共通の問題点がある。すなわち、学習者が日中漢字語の意味対応関係を知っていることを前提としており、実際に学習者がその分類を知らないという可能性が検討されていない。そして、手法的限界として、1つのみのテストだと、調査が行われる際に、問われる出題語の知識を学習者が持っているかどうかについては把握できない。よって、学習者の判断を一つの要因として扱うことが必要であり、2つの調査を行うべきだ。

また、意味推測研究の主な手法は、「選択肢式の質問紙調査」と「発話思考法」があるが、両方とも検討の余地がある。普段通りに読みながら口頭での母語訳をしてもらい、最後にフォローアップインタビューを実施するという調査法がより妥当である。

第4章では、既存の一番新しい枠組みに基づいて、従来の意味推測研究で最も評価された発話思考法を利用し、具体的な手がかりの項目を中心に、学習環境との相関を分析したうえで、漢字語の意味推測の実態を調査した。結果は以下の通りである。

- i. 学習環境と関係なく、未習の漢字語を推測する際に使った手がかりの内容は、「語彙知識」、「文脈情報」、「文法知識」、「世界知識」であり、主に「文脈情報のみ」、「語彙知識＋文脈情報」、「語彙知識のみ」、「文脈情報＋世界知識」、「語彙知識＋文脈情報＋文法知

識」という五つのパターンで推測していた。

- ii. JFL 環境と JSL 環境の間では、推測の手がかりの内容に違いはないが、手がかりのパターンに違いがあり、JSL 環境のほうがより語彙的手がかりを多く使用している。
- iii. JSL 環境にいる学習者は日本語との接触が多く、JFL 環境にいる学習者より日本語能力に自信を持っているため、語彙知識のみという方法をよく使ったが、正しい結果にたどり着けないことが多かった。逆に、JFL 環境の学習者は語彙知識のみという方法をあまり使わなかったが、正答率が高い。一方、JSL 環境の学習者はより文脈から役立つ情報を探す能力が高いため、文脈情報のみという方法を使うときは、JFL 環境の学習者より成績が良い。
- iv. 提示する文脈の長さは、文章なら 3 行ぐらいが一番理想的であり、文脈の内容は、個人の好みに合っているほうがモチベーションを高める。
- v. 学習環境と関係なく、最も推測しやすいのは N①語であり、その次は S 語、OⅢ語、N②語と OⅡ語であり、最も推測しにくいのは D 語である。そして、S 語、OⅡ語、OⅢ語、N①語、N②語において、JSL 環境のほうが正答率が高いのに対して、D 語のみが、JSL 環境のほうが正答率が低い。

この章では、中上級学習者による未習漢字語の意味推測の実態がある程度明らかになり、新しい枠組みの提案が必要であることが示唆された。

第 2 章～第 5 章を踏まえ、第 6 章と第 7 章では、提案した新たな枠組みと手法を使って調査した。

第 6 章では、初級と中上級の学習者を対象とし、二字漢字語の受容において、語のタイプ、ストラテジーの利用、未習・既習別、という 3 つの側面から検討するために、質的調査を行い、以下の結果を得た。

- i. 初級学習者にとって、未習の条件では、SJO 語がもっとも簡単であり、その次が OJO 語であり、NJO 語がもっとも難しいと言える。その差は、手がかりの使用とは関係なく、語自体の難易度の違いである。
- ii. 中上級学習者にとって、既習の条件では、SJO 語が OJO 語・NJO 語より簡単であると言える。そして、その差は手がかりの使用と大きく関わる事も推察した。SJO 語の場合は、既習の意味を文脈に入れて検証し、肯定的フィードバックを得て、確信できるというプロセスを経たが、OJO 語と NJO 語の場合は、文脈で再確認しても完全に確信できなくて、さらに色々な手がかりを使って推測するというプロセスを経ていた。

第 7 章では、厳密に調査時点で出題語の知識を学習者が持っているかどうかを把握した

上で、学習者の二字漢字語の受容と学習者の知識レベル（既知か未知か）、日本語能力（L2 能力）、漢字語のタイプ（語のタイプ）、漢字語のレベル（語のレベル）との関連性について調査を行い、以下の結果を得た。

- i. 付随的語彙学習を通して、知識レベルが低い語（未知語）の習得が進んできた。
- ii. 未知語の場合、上級学習者では、語のタイプ別の正答率の差が見られないが、中級学習者では、SJO 語が OJO 語・NJO 語より正答率が高い。一方、既知語の場合、L2 能力と関係なく、SJO 語が OJO 語・NJO 語より正答率が高い。
- iii. 未知語の場合、N2N3・SJO 語がもっとも簡単で、その次が N1・SJO 語、N1・OJO 語、と N2N3・NJO 語で、N1・NJO 語と N2・OJO 語がもっとも難しい。一方、既知語の場合、N1・N2N3 レベルの SJO 語と N2N3 レベルの NJO 語はより簡単であり、N1・N2N3 レベルの OJO 語と N1 レベルの NJO はより難しい。

第 8 章では、行った 3 つの調査を総合的に考察し、以下の結論を得た。

- i. 未知の場合は、語のタイプと関係なく、「語」「文」「統合」という 3 種類のストラテジーが使える。そして、未知の場合、同じ「統合」というストラテジーを使っている、語のタイプの間に正答率の差があり、SJO 語、OJO 語、NJO 語の順で正答率が減っていく。
- ii. 既知の場合は、SJO 語に出会った際に主に「検証」というストラテジーを使ったのに対して、OJO 語と NJO 語に出会った際には、「検証」か「推測」というストラテジーを使った。そして、SJO 語の正答率はほぼ 100%であり、OJO 語と NJO 語より高いが、OJO 語と NJO 語の間に、正答率でもストラテジーの使用でも差はなかった。
- iii. 正答率と日本語習熟度との相関を検討した結果、未知の場合、初級においては SJO 語、OJO 語、NJO 語の順に正答率が低くなるが、中上級においては、SJO 語の正答率が OJO 語・NJO 語より高いが、OJO 語と NJO 語との間に差はなかった。既知の場合、日本語習熟度と関係なく、SJO の正答率が OJO 語と NJO 語より高かった。

本論文は、(1) 中国語母語話者のための日本語教育という立場から、漢字語の日中対照分析の枠組みを提案し、分類の手順も決めたこと、(2) 漢字語の受容における習得研究の調査法の改善案を提案したこと、(3) 漢字語自体の難易度とストラテジーの使用を統合的に調査することによって、漢字語のタイプ、ストラテジーの使用、漢字語レベル、日本語習熟度と学習者の知識レベルが漢字語の受容に与える影響を明らかにしたこと、という 3 点で意義がある。